

(10) 「学び方学習」の流れ

「学び方学習」では、「ひとり立ち」につながる力として、日々の学習を通して次のような力を子どもたちにつけたいと考える。

「ひとり立ち」につながる育てたい力

- 学ぶかまえができる力
- なかまと聴き合い・学び合う力
- めあてや見通しをもち、主体的に学びとる力

学校教育における子どもの学びとは、もの（教材）と出会い、追究への価値を感じた子どもが、同じようにもの（教材）と出会った仲間との対話や活動を通し、自分自身との対話も繰り返しながら、ねらいとする力を獲得していく過程で、「分かった」「できた」「学んでよかった」という満足感をもち、さらに新たな追究へ向かう一連の自己変革の姿であるといえる。

そのために、授業では、子どもが追究への意欲をかき立てるもの（教材）に出会い、学習の問題をもつことが必要であると考え。本校では、子どもたちの問題意識から生まれ、教師と子どもたちで学習の目的や意義を話し合いながら設定した追究課題を「学習問題」と呼んでいる。自分とのかかわりにおいて「学習問題」を見つめたとき、一人一人が自分の考えをもち、本気で試行錯誤したり、友だちの考えに素直に共感したり、できた喜びに心をふるわせたりする姿勢が生まれてくる。そして、自らの力で解決していく経験や、なかまと学び合いながら共に解決していく経験をすることによって、自分のものとして学習を学び取ることができると考える。また、学び方が育ってくると、一つの問題解決を実現したことによって獲得された方法や諸能力は、次の問題への情熱を生み、その取り組みに生かされるのではないかと考える。